

2024年2月18日（大齋節第1主日、B年）

牧師メッセージ

「“霊”はイエスを荒れ野に送り出した」

（マルコによる福音書1:9-13）

司祭ヨセフ太田信三

荒れ野は人間が孤独や不安に出会う場所です。しかし同時にそのような場所だからこそ、神の近さを感じる場所です。モーセや預言者たちが神と出会ったのが荒れ野であったように、わたしたちもこの大齋節の四十日間、「荒れ野」で過ごすことで、あらためて神と出会います。

聖霊は神の力ですから、荒れ野へと主イエスを送り出したのは神でした。「送り出した。」と訳されている単語は、「力づくで追い出す」という強い意味を持っています。神は聖霊によって荒れ野へと主イエスを力づくで追い出したのです。そこには、荒れ野から悪霊を追放しようとする神の強い決意、堅い決意が表れています。

荒れ野とは一体どこでしょうか。それは「野獣と一緒におられた」ということに表されています。野獣は人を脅かす存在の象徴です。つまり荒れ野とはわたしたちの日常、人間の日常そのものを象徴していると言えます。わたしたちの日常には、わたしたちを脅かすような力、存在が溢れているからです。荒れ野は主イエスを守ろうとする天使たちと、主イエスを滅ぼそうとするサタンが激しくしのぎを削る場所でもあります。主イエスは野獣の住む荒れ野でサタンの試みを受けます。サタンはそこで神から離れさせるあらゆる誘惑で主イエスを試みるのです。神がどうしてもそのようなことをお許しになったのかと言うと、この誘惑との関わりを通して、主イエスが神との関わりを確認し、自らの使命を自覚するためです。「あなたはわたしの愛する子」と神が呼びかけた主イエスには、果たすべき使命があるのです。それはサタンに勝ち、神の国、神の支配の到来を示すことです。そのために、サタンの試みの間、四十日間ずっと天使たちが仕えていました。「荒れ野」とはサタンが試みる場であると同時に天使たちが仕える場、試みる者と仕える者とが共存する場なのです。それはまさに、わたしたちの生きる日常に他なりません。

主イエスは、サタンに勝利することが自らの使命だと知り、次の荒れ野＝人間が住む世界へと向かっていきます。イエスは福音を宣べ伝え、荒れ野をわたしたちが生きることができる場所へと変えていくのです。そのイエスが向かうのは十字架です。自分の命を賭して、荒れ野に生きる被造物すべてを、生も死も、時空をも超えて救いへと導くためにそこへ向かうのです。わたしたちは善と悪が拮抗している荒れ野で様々な試みを受け続けています。しかし、わたしたちと共におられるイエスが、いつでもサタンの試みを神との出会いのチャンスへと変えてくださいます。そのことを信じて、この四十日間を歩んでまいりましょう。